8. 人類の贅沢

人類の贅沢を抑える術

地上の植物は地中から水と何がしかの必須の元素を取り込み、地上で二酸化炭素と太陽からの光エネルギーを吸収して生命活動を維持するための活力となる物質を合成していますし、水中の植物は水に溶けた素材と太陽の光エネルギーを吸収して活力となる物質を合成しています。しかし、人類を含めて全ての動物は自分自身の組織の中に生命活動を維持するための活力の源になる物質を合成する能力を持っていません。当然、生命活動を維持するための活力となる物質を植物あるいは他の動物から取り込まねばなりません。そのため、全ての生物の間には弱肉強食、自然淘汰、共生など色々な形の関係が発生してきます。人類は敵対するものをできる限り駆逐し、活力となる物質をより安定に供給できるように肉体的な努力をし、知恵を駆使してきました。食用になる動物を家畜として養い、農耕により野菜や穀類を作付けてきました。作物の成長の助けとなる肥料や直射日光をできる限り与え、生長に害をなす微生物や昆虫や草木はできる限り駆除します。このような農耕や畜産により、自然が作り出してきた弱肉強食や自然淘汰の摂理を歪め、人類の身勝手な共生を作り出してきました。

太陽からの光エネルギーがないところでは生物は生命活動の活力となる物質を合成することができません。地球全体が吸収する太陽の光エネルギーは毎秒 1.0×10^{13} kcal でほぼ一定していますから、人類の身勝手な共生により自然の摂理をかなり歪めても、生産できる食料には一定の限度があると考えられます。言い換えれば地球に住める人類の数には限度があることになります。人間社会には地域の格差や貧富の格差がありますから、この人口許容量よりもはるかに少ない人口のときに、既に食料の取り合いから争いが起こってしまうでしょう。この人口の限界点は意外に小さな値ではないかと思われます。これからの人類の平和で安定した生活を持続するためには、現代のような個々の人間が身勝手に贅沢をすることは許されなくなるでしょう。

人類の多くの贅沢が多くの負の遺産を生み出してきました。大量のエネルギーを消費して、大量の害毒を撒き散らして、45 億年の間に釣り合ってきた地球のシーソーを傾かせています。これまで、このような大量の害毒の発生を規制する対応の後手に回ることが多かったように思います。多くの犠牲の後に足尾鉱毒事件や水俣病発症事件が社会問題になり、かなり遅れて対応策として法規制がなされてきました。オゾンホールが現れてからハロメタンやハロエタンの排出規制がなされるようになりました。かねみ油症事件やベトナム戦争の後遺症からＰＣＢやダイオキシンの耐容量が見積もられて、毒の拡散を止めることになりました。さらに京都議定書の承認により二酸化炭素の発生を抑制する動きが出てきましたが、エネルギーの無制限な浪費が根本の問題として残っています。これらの多くの社会問題において、問題の発生から対応策がとられるまでに長い年月が経過しています。

ある現象が問題化するまでに長い時間が経過し犠牲者が出ます。ついで、その現象の因果関係が色々と調べられ、原因が追究されます。さらに、その原因を解決する対策が考えられ法制化します。水俣病の場合には 1950 年代から水銀化合物の漏洩が始まり、60 年代に因果関係が確認され、70 年代に法制化が進み、被害者の補償が認められたのは 1980 年代でした。このよ

うに毒に対する安全の研究と行政的対応は遅れを取ってしばしば後手に回ります。

逆に、行政的対応に因果関係の追及が追いつかない場合もあります。オゾンホールが発見されてその対策が急がれました。地球科学者は色々な学説を考えましたが、ハロメタンやハロエタンがその原因物質であろうという説もその一つでした。完全に因果関係が証明されたわけではありませんがとりあえず法制化しましたので、結果として現在でも多くの疑問点が残っています。

現代のように自然の摂理を無視して、無闇矢鱈とエネルギーを無駄使いする贅沢が人類に許されて良いとは思えません。京都議定書で二酸化炭素の排出量を規制するようになりましたが、二酸化炭素の大気中への濃縮は大きな問題ではないのかもしれません。犯人を逮捕し犯罪が抑えられるのであれば「別件逮捕」も許されるように、エネルギーの浪費が抑えられるのであれば京都議定書は極めて意味のある規制と思われます。

人類に許される贅沢

人類を含めて全ての生物は種を保存し繁殖するために、生命活動を続けています。2 種以上の種がその繁殖のために競合するときには、互いに争い滅ぼしあう弱肉強食、自然淘汰という自然の摂理が働きます。文明が発展するにつれて、確実に食料を得るために農耕が始まり、森を焼いたり、野に水を引き入れたりするようになりました。原生していた木草を取り除いて、食料の供給に適した作物を移植するようになりました。耐久性に富んだ毛皮や織物を着用するようにもなりました。この時点で人類は既に多少自然に手を加え、自然の摂理を歪めるようになりましたが、人類の生活に必要な自然の破壊に限られており、弱肉強食、自然淘汰という自然の摂理を大きく逸脱するものではありませんでした。人類が生活を維持し、繁殖するための最小限の自然破壊ですから、この程度では人類の贅沢とは考えられないと思われます。

近年になって知識や技術が進歩向上するにつれて、人類は安定した生活、快適な生活を飽くなきまでに追及するようになりました。子々孫々の代までの食料を安定して確保するために、食料を大量に貯め込むようになりました。必要な栄養を摂取するための食料から、しだいに趣向を加味した食物に変化してゆきました。この段階では必要以上の食糧を生産しているのですから、人類は食料の安定供給や味覚の満足という贅沢を始めたことになります。繊維を色々と染め上げて華やかな衣服を織り上げるようになりましたが、これも気持ちを晴れやかにし、他の人と差別するための人類の贅沢の始まりでしょう。雨露を凌ぎ外敵から身を守るための住居も大きく堅牢なものになってきましたが、これも生活を快適にするための人類の贅沢の始まりでしょう。人類が安定した生活を送り、子孫の繁殖ができる最小限の蓄えと住居の確保が贅沢との境目ではないでしょうか。

人類の食料を牛や豚や鶏に食べさせて、食肉や鶏卵や乳製品として食卓に並べていますが、この変換効率は決して高いものではありません。魚屋さんには春先でも秋刀魚が並び、隣のショーケースにはアフリカの近海で獲れたマグロの刺身が売られています。夏野菜の胡瓜やトマトは冬でも店頭にあふれ、イチゴの最盛期はクリスマスの時期に移ってしまいました。比較的収穫量の少ないコシヒカリやササニシキが珍重され、さらに糠として玄米の 10%以上も精米してしまいます。季節に即した旬の食物、その土地土地で収穫された食物、本来の姿を保った食物など、自然の摂理にのっとった食物を身体の状態にあった量だけ食べることが望ましく思わ

れます。食べ残しなとは最も慎むべき贅沢ではないでしょうか。

地球上には人類の住めないほど高温の土地はほとんどありませんし、極地以外では人類の生活できないほど寒冷な土地もありません。大量の水のお陰で地球は極めて温和な気候の惑星ですから、僅かな暖房が必要なだけで、冷房など全く生活には必要ないと思われます。わずかな生活圏に自然に適応した生活をするときには、エネルギーの消費量も大いに抑えることができるでしょう。現代の人類、特に都市部に生活する人類はとてつもない贅沢をしており、その例は枚挙にいとまがありません。

さらに、軍事行動はその本質自体が殺戮と破壊を目的とし、全く生産性のない浪費です。アメリカ合衆国からはるかに遠く離れたペルシャ湾まで数万トンもある航空母艦を航行してゆき、イラク各地を爆撃して破壊を続けています。航行のための燃料、爆撃機のジェット燃料、爆撃のための火薬、その他諸々の戦略物資の消費は膨大なものでしょう。攻撃のために多用されている各種のミサイルは燃料、爆薬、巡航用のエンジン、攻撃目標までの誘導制御装置など全て一度に消費してしまいます。戦争のための消費は全て、人類の本来的に必要な物質の消費とは全く無関係なものであり、人類の最大、最悪な贅沢と思われます。

人類が動物の一種として生活するために必要な最小限を超えて物質やエネルギーを消費することは、浪費であり、人類の贅沢と考えられます。さらに、人類との共存ができずに人類の贅沢の犠牲になり、多大の被害を被ったり、種の存続まで危うくされた生物がいることは、人類の横暴と云わざるを得ません。